

---

# 赤の破壊者

時間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤の破壊者

### 【Nコード】

N4316Y

### 【作者名】

時間

### 【あらすじ】

真冬の冬。そんな雪が降っているある日。  
血まみれの少年が公園で雪をかぶって倒れていた。  
そんな少年を一人の男が少年を…。

## 登場人物

”死にたい”ただ…それだけが、僕の生きている理由だと思った。

白夜<sup>びやくや</sup> 詩雅野<sup>しがの</sup>

不明（見た目、17歳か18歳くらい）の男の子。  
生意気だけど暗くて無口で笑わない。

ヴェンパイア族の生き残り。

いつも命を狙われている。

人の未来を見ることが出来る。

血は吸わない。いつも”死にたい”と言う気持ちを持っている。

時無詩<sup>ときなし</sup> 静<sup>しずか</sup>

18歳の男。

無愛想で無口で冷たい。

他人には無愛想であまり笑わなくて無口だが、  
なぜか、詩雅野だけには結構生意気で優しい。

詩雅野と一緒に住んでいる。

詩雅野がヴァンパイアとは知らない。

とてつもなく、馬鹿力な能力を持っている。

## #1 雪どけのヴァンパイア

”死にたい”ただ…それだけが、僕の生きている理由だと思った。

バキユンッ！

「ハア…ハア…。」

「待て！この化け物が！」

「ハア…ハア…。」

「チッ…見失ったか。」

バシャッ…タッ

一人の血だらけの少年が歩いていた。

誰も居ない、公園。

雪が積もって、雪が降っていた。

そして、血を流して、木にもたれる少年が居た。

「ハア…ハア…死ねる…。」

バタンッ

死ねるなら…一人で静かに死にたい…。

『生きて！詩雅野！』

ハッ！

「?!…。」

少年は包帯を巻かれてベッドに寝かされていた。

「…どこだ…ここは?…。」

ガラッ

誰かが病室に入ってきた。

「起きたか？」

「…人間か…なんのようだ？」

「はあ？」

「僕を殺しに来た…?!」

「何で、俺がお前を殺しに来るんだ？」

「マフラー…はどこだ！」

少年は探す。

「これか？」

「あつ！」

男が持っていた、しましまのマフラーを少年は取った。

「お前…何者なんだ？」

「はあ？…意味不明なんだが…。」

ガラッ！

「おはよー！静！」ニコッ

「麗!？」

タッ！ガラッ！

「あつおい！」

少年は窓から飛び降りた。

「おい！待て！」

「えっ？静？」

部屋には、女の子一人になった。

「静あああああああ！………!」

「いたぞ！」

「!?!? 見えない!?!?。」

「待て！」

バキューンッ!!

シュッ！

銃の弾が背中にかすった。

「！？…クッ…。」

「化け物のくせに、傷はすぐに治らないようだな！」

「…殺したければ、殺せばいい。」

「何？」

「別に、こんな世界にいても、自由なんてない。

一生、お前等に追い続けられないといけないんだろう？」

「ああ…そうだ。なら、もう殺してやるよ！」

「……。」

「チッ。」

「！？…。」

少年はさっきの男と共に消えた。

「何！？」

「！？…お前…。」

「何してんだよ！死ぬ気か？」

「人間のお前に何が分かる。」

グイッ！

「？！…。」

「いいから来い！」

男は少年の手をつかんで、一つの家（？）に向かった。

ガタンッ

ドアが開いた。

そして、一人の女の人が出てきた。

「初めまして、未来が見える能力を持っている白夜詩雅野君」ニッコッ

「！？…。」

「で、いきなりだけど、詩雅野君。ここで死ぬか、ここで生きて私の手伝いをするか選んで？」ニコッ

「…そんなの…」

「生きてここにいるに決まってる。」

「！？…なっ！」

男が詩雅野の代わり言った。

「そっか、私はこの家の主の董咲霏。すみれさきみぞれよろしくね」ニコッ

「ちなみに、俺は、時無詩静。よろしくな！詩雅野」ニコッ  
「…。」

不幸だな…僕は…。

「じゃあ、静が詩雅野君の面倒見てね。それと、学校も行ってね」

ニコッ

「……。」

「返事は？詩雅野君？」

「はい…。」

「って、事は同じ部屋だな。俺等。」

「！？…最悪…」ボソッ

## #2 同居・学校

お前は、必要ない！存在の価値すらない存在だ！お前など存在しても誰も喜ばない！

ハッ！

「！？…ハア…ハア…。」

詩雅野は少し焦った顔をして起きた。

「…また…。」

詩雅野は時計を見た。

時刻…5：00――。

「…はあ…。」

気持ちが不安定な時いつもあんな夢を見てしまう…。

「…存在価値…。」

トントントン

ガチャッ

詩雅野の部屋に誰かが入ってくる。

「…詩雅野。おきてたのか？」

「静…さんは早いんだ。」

「別に。飯できてるぞ。」

「ねえ。」

「ん？」

「このアパートって皆住んでるの？」

「住んでるけど、なんだ？」

「いや…別に。」

二人は台所に向かう。  
詩雅野は椅子に座る。

「……。」

「どうかしたのか？」

「なぜだ？」

「昨日と違って、何かしょんぼりしてるからな。」

「別に……。」

「変な奴だな。」

「あんたもだろう……。」

「ほら。」

「？……なんだこれ？」

詩雅野の目の前には、目玉焼きと食パンが出てきた。

「はぁ？お前目玉焼きと食パンを知らないのか？」

「知らないも何も……食べた事も見たこともないぞ？」

「お前……一体何食ってたんだよ？」

「……分からない……。」

詩雅野は暗い顔をした。

「何で？」

「僕には、記憶がない。ただ名前と死にたいという気持ちしか知らない。」

「……はぁ……いいからさっさと食べるよ。学校行くからな。」

「……学校……？まあい。」

詩雅野は食べ始める。

「うわぁ……お前喰い方がやばいな。」

「んぁ？何がだ？」

「はぁ……ほら、いっぱいいついてるぞ。」

タオルで詩雅野の口の周りを拭く。

「……？……。」

詩雅野はぼかんとした顔をした。

「面倒だ。」

「はぁ…もうこっち来い！」

「なんだ？」

静は詩雅野のネクタイを結ぶ。

「お前、何も出来ないのか？」

「分からない…だが、家族はいないと分かる。」

「なんだよ、それ。早く行くぞ！」

「…分かっている。」

ガチャッ

二人は家から出る。

「あっ！静！おはよう！」ニッコッ

「おう。麗」

「……。」

詩雅野は急に黙り込む。

「詩雅野？」

「…はぁ…。」

コケッ！

「！？…うわぁ！」

「詩雅野！」

詩雅野は階段から滑り落ちる。

ドンッ！ガタッ！

静と詩雅野が階段から落ちた。

「大丈夫！二人とも！」

麗が慌てて二人に駆け寄る。

「痛ッ…大丈夫か？詩雅野？」

「……。」

詩雅野は起き上がる。

「…大丈夫?…。」

「って、お前こそ大丈夫か?」

「あっ…うん。」

「そうだ。私は麗。小室麗こむろれいよろしくね」ニッコ

「…。」

「早く、行くか。」

三人は学校に向かった。

麗は静に話しかけているが、静はあんまり聞いていない。

詩雅野はどこかをずっと見ていた。

そして、学校。

「キヤアアア!!可愛い!」

「転入生の白夜詩雅野君だ。仲良くしてあげるよ。」

「……。」

詩雅野は無口だった。誰とも喋らず。

「存在価値などない…ヴァンパイアなんて…死ぬしか道はない…。」  
ボソッ

### #3 同居・花園

【詩雅野、ありがとう。私とっても嬉しいよ。詩雅野がいてくれるだけで！】ニコッ

お前も所詮は僕のものじゃ無い…。

「おい！白夜！白夜！起きろ！」  
ハッ！

「！？。。」

先生が詩雅野を起した。

「どうした？顔色悪いぞ？」

「…あつ、大丈夫つす。」

「そうか？なら黒板の問題を解いてみる。」

「…x - 8。」

「正解。」

詩雅野は窓から空を見上げていた。

人間は…自由でうらやましい…。

「詩雅野！おい。」

「ん？。。」

詩雅野は目を覚ます。

「お前な、弁当は？」

「飯？…ふわぁ…眠いからいらない…。」

「いいから、来い。」

詩雅野は静に連れ去られる。

廊下を歩くと。

「キヤアアア！静先輩と詩雅野君だ！！あの二人仲いいのかな？？」  
えらく注目されている。

「あつ！静！と詩雅野君。一緒にご飯食べよう」ニコッ

「おう。」

「。。。」

薔薇一面に咲く、場所に来た。

ドクンッ！

「！？。。」

「詩雅野？」

詩雅野の様子がおかしかった。

「。。。薔薇。。」

【詩雅野、薔薇の花言葉は”愛情”。私が詩雅野に愛情を注ぐからね】ニコッ

「。。。ハア。。。ハア。。。ハア。。」

「詩雅野？」

「愛情。。。薔薇。。。存在価値。。。」

僕はなんだ？。。。お前は誰だ！。。。。

【詩雅野！】ニコッ

お前は誰なんだ！！！！

『好きよ、詩雅野』

ハッ！

「!?!?…うわあああああああ!?!?!?!」

「詩雅野?」

詩雅野が頭を抱え、大声をあげる。

「ハア…ハア…ハア…」

バタンツ!

詩雅野が倒れる。

「おい! 詩雅野!」

「どうなんだ?」

「感情が高ぶっただけかもねしれないよ」ニコッ

「そうか…」

「珍しいね、静が心配するなんて。」

「うつせよ。」

霽と静は結構仲がいいのかもしれない。

詩雅野はベッドで眠っていた。

「じゃあ静、この約束は守ってね。」

「??」

霽が言う。

「一つ、詩雅野君をあまり、女の子に近づけない。

二つ、詩雅野君をあまり、外出させない。

三つ、詩雅野君にあまり、花とか花園には行かせない、近づけない。

これは守ってね!」

「…分かった。」

「う…ハア…ハア…」

詩雅野はうなされていた。

「詩雅野…。」

「そばにいてあげなさいな。」

「あつ…おう。」

静は詩雅野の前にある、椅子に座る。

「あつ、メイドさんー兎さん。」

雲が兎の帽子をかぶっている少年とメイド服を着ている少女に声をかける。

「兎って言うな!」

「なんですか?」

「ちよいと、仕事してくれない?」ニコッ

「いいぜ。」

「かしこまりました。」

#### #4 同居・双子（前書き）

なぜか、私の小説は双子が多いなあ〜ww  
本人、双子LOVEですねww

#### #4 同居・双子

「お兄様、新しい方はどんな方なのでしょう？」

「兎が知るわけないだろうが。」

「そうでございますか。」

「だが、依頼を受けたからには、やるしかないか。」

「そうでございますね」ニコッ

「さっさと行くぞ。」

「かしこまりました。主。」

二人は歩く。

「う…う…ハア…。」

「…。」

ガラッ

「静、私行くけど、休む？」

「あ…行く。遅刻するって言うてくれ。」

「了解」ニコッ

「頼んだ。」

麗は部屋から出て行った。

『詩雅野は、カッコイイよ。私を守ってね。詩雅野』ニコッ

ハッ！

「！？…。」

詩雅野は目を覚ました。

部屋には詩雅野一人だった。

ガラッ

「…。」

「ご主人様、お茶をお持ちしました」ニコッ

一人のメイドの服を着た、少女が紅茶を机に置く。

「???。」

カタンッ！

「?!…。」

そして、一人の兎の帽子をかぶった少年が詩雅野の前にある椅子に座る。

「うさぎは、衣織白兎。」

「私は、衣織白葉と申します。」

「……。」

「お前に話がある。」

「…。」

白兎が微笑んて言う。

「お前、未来が見えるんだよな？」

「あつ…うん。」

「なら、ちよつと来い！」

グイッ！

「?!…ちよッ!…。」

白兎は詩雅野の手を引っ張る。

「主。詩雅野様は病人ですが、よろしいのですか？」

「別に、いいだろう？うさぎにだって依頼なんだしな。」

「かしこまりました。」

「あつ…おい！」

白兎と白葉は詩雅野を連れて、窓から飛び降りる。

「さつさと、依頼終わらせて、うさぎは寝る。」

「そうでございますね。主。」

「……。」

なんだ…こいつら…。

「…。」

「静！一緒に帰ろう」「ニコッ

「おう。」

静の携帯がなった。

「はい？」

『静！まずい！』

「震？どうかしたのか？」

『詩雅野君がいなくなったの！』

「何？！…。」

『いいから、詩雅野君を探して！お願い！』

「了解！」

静は電話を切った。

「どうかしたの？」

「詩雅野がいなくなった！」

「えっ？！…私も探すよ！」

「おう！見つけたら、電話くれ！」

「うん！任せて！」ニコッ

静と麗は詩雅野を探した。

「…で、何するの？」

「この依頼者の未来を見てほしいのだが。」

「…。」

詩雅野の目の前には一人の少女が居た。

「何で？…。」

「今回の依頼は依頼者の未来を見てくれとの依頼だからな。」

「…しょうがない…」  
詩雅野は少女に触れた。

「好きだよ」「ニコッ」  
「俺も、これからも一緒に居ような。」  
「うん!」「ニコッ」

「…。」  
「どうだ?」  
「告白されてた…。」  
「そうか。」  
「……。」  
「主。依頼は完了しました。帰りましょう。」  
「そうだな。よし帰るぞ!」  
「なっ?!…。」  
白兔が詩雅野を担ぐ。

さっきの未来…僕には無縁の未来だ…。

#### #4 同居・双子（後書き）

アドバイスなどがあれば、ください。  
お願いします！！

## #5 同居・精霊使い（前書き）

今回は精霊使いの少女です。

## #5 同居・精霊使い

タツ！

「うわぁ！？」

ズッズッ！

「大丈夫か？詩雅野？」

「あっ…うん。」

詩雅野はとつても嫌な顔をする。

「うさぎは優しくしたぞ。」

「……。」

白兎は詩雅野を下ろす。

ガラッ！

「詩雅野！」

「…静さん！」

「お前等、勝手に詩雅野を連れまわすなよ。

連れまわすならメールか電話しろ！」

「はいはい。帰るぞ白葉。」

「はい。主。」

二人は去って行った。

「なんだったんだ？…。」

「詩雅野も、あんまりああいふ奴についていくなよ！」

「…僕は子供じゃない！」

「詩雅野？…。」

「もういい。僕は先に部屋に戻るからな！」

「はいはい。」

詩雅野は部屋に戻った。

タツ  
タツ

「血を吸う者の匂いがする…。」  
ヴァンパイア

ドクンッ！

「！？…ハア…ハア…ハア…。」

夜はいつも、詩雅野は起きる。

「…ハア…ハア…夢…。」

いつも、一緒の夢…。

ガチャッ

誰かが、部屋に入ってきた。

「！？…。」

詩雅野は恐る恐る、静かに動く。

「空黄…。」  
そらぎ

ガッ！！

「？！…。」

詩雅野が壁に吹き飛ばされる。

「ガハッ！…。」

「居た…。」

「！？…。」

詩雅野の目の前には、一人の少女が立つ。

なぜだ…何も無いのに…。

「未来は見えないの？…。」

「！？…。」

「君の未来は全て、自分じゃない。他人だけの未来が見えるだけなんだよ…。」

「!?!?。」

「応えて、ヴァンパイア。」

「?!?!?。」

「追手!?!?まさか、こんな所まで来るのか?!?。」

「……。」

「ヴァンパイア?!?。」

「パチッ!

部屋の電気がついた。

「しーちゃん。」

「闇香、何してんだよ。」

「……はあ?。」

二人は知り合いらしい。

「こいつは、黒咲くろさき闇香。」

「さつきはごめん……炎舞が勘違いで間違えた。」

「何をだ?。」

「生き残ったヴァンパイア。」

「?!?!?。」

「なんだ、それ?。」

闇香は立った。

「また、明日。皆の前で話す。」

「そうか?分かった。今日は寝ろよ。」

「うん。お休みしーちゃん。」

「お休み。」

そして、部屋のドアが閉まった。

「詩雅野?どうかしたか?。」

「いや……別に。もう寝る。」

「おう。」

詩雅野は寝転ぶ。

僕は…狙われているのか？…。

## #6 同居・情報

朝の光が、詩雅野に差し込む。

「…ん？…朝か…。」

夢は見なかった…落ち着いていたのか？…。

「ふわあ…ん？」

詩雅野は食堂に行く。

アパートでも、食堂やら屋上やら何かいっぱいあるらしい。

「詩雅野君！おはようー！」ニコッ

麗が詩雅野に微笑む。

「…おはよう…。」

「…昨日の少年だ。」

「詩雅野か。おはよう。」

「詩雅野君、おはよう。よく寝れた？」

「…：…そんなに一気に言われても応えれない。」

詩雅野は椅子に座りながら言う。

「で、昨日。俺の部屋で言ってた事は？」

静が闇香を見る。

「…精霊から聞いた話だよ。」

「お前の精霊は情報が早いな。」

「大事な話になって思っ、皆呼んだよお」ニコッ

霏は笑顔で言う。

「皆っ…はあ…。」

静は頭を抱える。

「詩雅野！…！」

「うわあ？！…」

「!?!?。」

白兎が後ろから詩雅野に抱きつく。

「皆さん、ご無沙汰しております」「ニコッ

「あつ…うさうさとはくはく!」

「そんな名前で呼ぶな!」

闇香はなぜかテンションが高かった。

「まったく、いつ見てもうるさい連中ですね。」

「閃は嫌い?」

「苦手なだけですよ。」

二人の少年少女が来た。

少女の名前は『ちよつかけきくほたる蝶影菊蛸』

少年の名前は『あかみどりせんけん赤緑閃剣』

「つて、早く席についてね。」「ニコッ

雲が皆に指示する。

「と、それじゃ、席に着いた所で闇香ちゃん、説明お願い」「ニコッ

「…了解。」

闇香は真ん中に座る。

「今、この世界中で、ヴァンパイアの生き残りを探してる。」

「ヴァンパイア?そんなのいるのか?」

白兎がお茶を飲みながら言う。

「最後まで聞いて、それから質問してよ。うさうさ。」

「だから!うさうさじゃねえーよ!」

「はいはい。」

静がケンカを沈める。

「その、ヴァンパイアの生き残りを探して、見つけ出したら、報酬  
がもらえるらしい。」

「!?!?。」

「報酬?…なんで?」

「滅多にいないんだって、ヴァンパイア。しかも生き残りだから、一人らしいよ。」

「一人ですか…今も探してるんですか？」

「うん。殺し屋やマフィアとかはもう探し始めてる。」

「へえ…。」

皆いろいろ考え始める。

「そのヴァンパイア、何回か、見つかって捕らえられたけど、脱出したって話よ。」

「ふ〜ん…やるな。」

「そんな、ヴァンパイアがいるなら僕は見て見たいですよ。」  
閃剣が言う。

「特徴とか無いわけ？」

「特徴？…えつとね…左目に傷跡が合って、首から背中にいれずみがあるらしいよ。」

「そんな奴、絶対あやしいだろう？」

白兔が言う。

「!?!?!?!?!。」

詩雅野は酷く動揺していた。

「詩雅野？」

ビクッ!

「?!?!?!。」

「詩雅野?どうかしたのか？」

静が詩雅野を見る。

「…なんでもない…悪い、僕少し外の空気を吸ってくる。」

「あつ!詩雅野!」

詩雅野は外に出て行った。

「どうしたんですか?あの人。」

「さあ…。」

「…。」

「ちよつと、俺行つて来る。」

「あつうさうさ!」

白兔が詩雅野を追った。

「ハア…ハア…ハア。」

パシッ!

「!?!?。」

誰かが詩雅野の手をつかんだ。

「ハア…詩雅野、どこまで行くんだよ。」

「…白兔…さん。」

「さんは要らん。」

「…うん。」

「雨降つてるのに、風邪引くぞ。」

「…白兔こそ、引く。」

「別に、俺はバカだからな」ニコッ

「……。」

詩雅野は暗い顔をする。

「お前…何か隠してるのか?」

「えっ?…。」

## #7 同居・心配

雨は降り続けていた。

「……………」

詩雅野は白兔から目をそらす。

「詩雅野？」

「…いいからもう帰る。」

詩雅野は歩いていく。

「……………」

何を隠しているんだ？…あいつは？

『助けて』

「!?!?!」

白兔の耳には一瞬、誰かの声が聞こえていた。

「…白兔？」

「助けを求めてる…。」

「えっ？」

「こっちか!」

「あっ!おい!」

白兔は、一直線に走っていく

詩雅野は白兔を追う。

「誰だ!うさぎを呼んでいるのは!」

『助けて…。』

「おい…白兔?」

白兔は叫んでいた。

「うさぎを呼んでいるんだ！」

「…？」

「あつ居た！」

『助けて…。』

白兎は箱を見つけて、走り出す。

「…猫？」

白兎は箱の中に入っている猫を抱き上げる。

「お前か？うさぎを呼んだのは？」

『うん。…見つけてくれて…ありがとう。』

「お前はうさぎが面倒みるからな。」

白兎は猫を服の中に入れて、帰る。

「詩雅野！帰るぞ！」

「あつ…おう。」

詩雅野は道路を通行しようとする。

ニッ

「死ね。」

「?!…。」

ドンッ！

詩雅野が誰かに押される。

「詩雅野！」

詩雅野の目の前には車が通ろうとする。

「?!…。」

死ねるのか？…僕は…？。

詩雅野は目を静かにつぶる。

「詩雅野！！！」

『詩雅野！絶対、私より早く死んじゃ駄目だよ』ニコッ

「…ごめん…約束守れない…。」

ガシャーンッ！！

「……。」

「たく、何してんだよ。」

「…?!」

白兔が詩雅野を助けた。

「大丈夫か？」

車から人が降りてくる。

「あっおう！大丈夫！心配しない！」

「そうかい！ならよかったよ！」

そして、おじさんは車に戻り、どこかに去って行った。

「大丈夫か？」

「…大丈夫…。」

「そうか」ニコッ

「?!…。」

白兔が詩雅野の頭を撫でる。詩雅野は顔を赤く染まる。

「晴れてきたぞ。」

「……。」

「やっぱり、しぶといなあゝ詩雅野は。」

## #8 同居・風邪

「……。」

「大丈夫か?。」

「…そんなのに…見えるか?。」

詩雅野が風邪で寝込んでいた。

原因は、この前の雨。

白兔は風邪を引かなくて、全部詩雅野が受けてしまった。

「ハア…ハア…。」

詩雅野は顔が赤い。

「大丈夫か?。」

同居の静が面倒を見ていた。

「まあ、もう寝ろ。」

「…うん。」

詩雅野は静かに目をつぶって、眠った。

『詩雅野!大丈夫?私が看病してあげるね!大丈夫。いつも一緒にいるよ』ニコッ

お前はあの後、どこに行ったんだ?…。

覚えてない…記憶が大切な時の記憶が途切れている…。

分からない…その記憶の続きが分からない…。

ガラッ

「ん？白兔？」

「うさぎも見舞いに来た。ほれ。」

白兔は静に向日葵を渡す。

「よく、合ったな。」

「探すのに、苦労したぞ？」

「主は必死に探してました。」ニコッ

「そうか、サンキュ！」

「別に！！じゃあな！」

白兔と白葉はそのまま部屋を後にした。

ガラッ

「しーちゃん。」

「闇香。」

「お見舞いに来たよ。」

「ありがとな。」

「あの子、寝てるの？」

「寝てる。」

「そっか。はい。」

「ん？なんだこれ、絵？」

「そっ、精霊と書いたんだ。はい。あげる。」

「ん、サンキュ。」

「じゃあ、バイバイ。」

闇香は静に絵を渡して、部屋を去った。

「。。。」

ガラッ

「静さん。」

「静。」

「菊蚩、閃剣。」

「あの人…。」

「ん？」

「菊蛸の影狼が、あの人を見て何か違和感を感じたそうです。」

「違和感？」

「それを伝えに来ただけです。」

「だから…気をつけてね。」

「おう。ありがと」ニコッ

「うん。じゃあ。」

「失礼します。」

二人は部屋から出て行った。

「詩雅野。お前、結構心配とかされてるんだな。

友達も仲間も出きて、よかったな。」

静は寝ている詩雅野に話した。

ガラッ！

「麗と霏？」

「はい、これ。」

「果物？」

「私、忙しいからこれで！」

霏は果物を渡して、去った。

「…麗？」

「あつ…詩雅野君…大丈夫？」

「あつ…寝てるから、大丈夫だろう？」

「そっか…」ニコッ

麗は優しく微笑む。

パチッ…

「ん？…。」

詩雅野は目を覚ます。

「…二人で何してんの？…。」

詩雅野は二人を見る。

「別に…。」

「な…何もないよ!!」ニコッ

「…別にいいけど…。」

詩雅野は再び眠った。

## #9 同居・脅迫

『お前の秘密を僕は知ってるよ?』

ハッ!

「!?!?。」

詩雅野は驚いて目を覚ます。

「ハア…ハア…ハア…。」

詩雅野はとても暗い顔をしている。

誰だ?…僕の秘密を知ってる?…ヴァンパイアの生き残りの事?…。

「!?!?。」

知られたくない…知られるのが…。

ガチャッ

詩雅野はフラフラになりながら廊下を歩く。

静はまだ寝ていた。

「ハア…ハア…。」

詩雅野は外に出て行く。

誰なんだ…誰…。

ドクンッ!

「!?!?。」

詩雅野の目が変化し始める。

なぜだ…ヴァンパイアが疼いている…。

詩雅野はしゃがみこむ。

目を手で押さえる。

「ハア…ハア。」

タツ

「お前の秘密を僕は知っている。」

「!?!?。」

詩雅野の目の前には誰かが立っていた。

「誰…だ?」

「僕は…、アルカナメンバー?。風。」

「…アルカナ?…。」

詩雅野はフラフラしながら、立ち上がる。

「僕は、お前を迎えに来た。」

「…僕を?…。」

「そう。メンバー1《メイロ》に頼まれて。」

「メイロ?…。」

「僕とくれば、秘密を誰にも教えない。

だけど、来ないのならば、お前の仲間を一人ずつ殺す!」

「!?!?。」

風は不気味に微笑む。

「僕は…。」

「お前には自由は無い。」

「!?!?。」

「お前の命も運命も僕達、アルカナが握ってるからね」ニッコソク  
そのまま風は消えた。

「……。」

詩雅野は手を下ろした。

「……。」

そしてマフラーを握る。

僕の秘密…仲間が死ぬ…。

「僕は…どうしたらいい？…分からない…。」

詩雅野は道端でしゃがみこむ。

シュッ！

「…ヴェンパイアの匂い。」

「うわぁ！！早いね！！」

「能天気だな。」

森には二人の男女が近づき始めている。

## #10 同居・恐怖

「お前の秘密を僕は知ってるよ？」

あいつの言葉が…頭から離れない…。

何で僕の事を知ってるの？…。

「おい！詩雅野！」

ハッ！

「！？…。」

詩雅野の目の前には心配そうな顔をする、静が居た。

「静…さん。」

「大丈夫か？顔色が悪いぞ？」

「大丈夫…。」

「そうか？それならいいが。」

「ほら、詩雅野。」

「白兔…。」

白兔が詩雅野の紅茶を渡す。

「ありがと…。」

「おう。」

白兔が床に座る。

「主、椅子に座つては？」

「あつ…ここでもいい。」

「かしこまりました。」

白葉は白兔の隣に座る。

「……。」

『君の事はいくらより、僕の方が知ってるよ？』

僕は…何を焦っている…。  
ヴァンパイアとしられても…僕が出て行けばいい…死ねばいい。  
ただそれだけの事なのに…。

「詩雅野?…。」

『君はヴァンパイア族、人間とは一緒には入れない。』

違う！僕は…、一緒に居たいと望んでない！

「!?!?…。」

「麗?」

麗の表情が変わった。

「どうかしたのか?…。」

「…あつ…詩雅野君。」

「…。」

詩雅野は顔をあげて、麗を見る。

「何をそんなに…おびえているの?」

「!?!?…。」

怯えてる?…僕が?…。

「詩雅野が怯えてる?麗、お前バカだろう?」

「もう!!!本当だもん!!!」

「……。」

「!?!?。」

急に詩雅野が立って、皆驚く。

「…悪い、もう部屋に戻る。気分が悪いから…じゃあ。」  
「あつ！詩雅野！」

詩雅野は急いで部屋に戻った。

「ハア…ハア…ハア…。」

「ねえ、君は何でそんなに怯えてるの？」

詩雅野の目の前には今日の朝合った、男が現れた。

「詩雅野はヴァンパイア、だから僕と行こう。」

「……いけない。」

「なぜ？」

僕はやっぱり…。

「僕は…いけない。」

あいつらに…。

「僕の居場所は…ここ。」

自分の正体を…。

「そつか、だけど君は後悔するよ?」  
「えっ?…。」

知られるのが…。

「だけど、また気が付いたときに会おうね、詩雅野」ニッコッ  
そして、消えた。

怖い…。

軽蔑される、怖がられる…そんな事しか頭に浮かばなかった。

## # 11 秘密・狙い

詩雅野はいつか死んでしまうの？私をおいて、一人で？…。

あんたはいつも、そんな事を考えていたのか？…。

僕は死なない…死ねない…。

「詩雅野！」

ハッ！

「?!…静!?!…」

静の声で詩雅野が目覚めます。

「大丈夫か？うなされてたから、起したけど。」

「…あつ…そう。」

詩雅野は結構顔色が悪かった。

「…。」

「!?!…」

静は詩雅野の目をじつと見る。

「…何？」

詩雅野は頬を赤くする。

「詩雅野？顔が赤いぞ？どうかしたのか？」

「別に!?!…」

静は…鈍感か…!?!…。

「詩雅野君！静！おはよー!!」「ニコッ

「!?!…」

麗が部屋に入ってきた。それと同時に詩雅野は顔色を変えた。

「詩雅野？」

「…僕、外の空気吸ってくるから…。」

詩雅野は部屋から去って行った。

「…やっぱり、あの言葉が詩雅野君を苦しめたのかな?…。」

「大丈夫だろう?いつかは、自分の能力を打ち明けたらいいだろう?」

「そうだね。静は優しいね、ありがとう。元気出てきたよ」「ニコッ  
「そっか。ならよかったな。」「ニコッ

静は麗の頭を優しく撫でる。

タッタッ

「ねえ、閃!何してるの?」

「菊蛸。別に何もしてませんけど…。」

「そうなの?じゃあ、私と遊ぼう!」「ニコッ

「…しょうがありませんね。でわ行きますよ。」

「うん!」

閃剣は頬を赤くして、菊蛸と手を繋いでどこかに去った。

詩雅野は一人で外に居た。

怖い…軽蔑…どんな顔をする?…。

「…僕はどうすればいいんだろう?」

詩雅野は座り込む。

「自分の思うようにすればいいんじゃないか?」

「!?!?白兔!?!?白葉さん…。」

詩雅野の目の前には白兔と白葉がやってきた。

「白葉で構いません。」

「そっ…分かった。」

「で、何に悩んでるんだ?」

「…分からない。」

「はあ？分からないのに、悩んでるのか！？」

「…あつうん…。」

詩雅野は空を見上げる。

白兎と白葉は詩雅野の近くに座る。

「なあ…例えばの話だけど…。」

「ん？」

「僕がもしも、人間じゃなかったらどうする？。」

「！？…。」

詩雅野は白兎の顔をした。

白兎はとても、驚いていた。

「…あつ…例えばの話だつて…。」

「…うさは多分…軽蔑と罪悪感と憎しみと恨みでお前を殺すかも知れない。」

「！？…。」

「そうですね。主が望むならそれは、病む終えません。」

「……。」

詩雅野の周りが真っ暗になった。

『君が望んでない事を言うんだよ？人間って言う生き物は！』

「…僕は…。」

『軽蔑、罪悪、憎しみ、恨み、悲しみ、絶望、それで人間はお前を殺す！』

「やめろ…。」

『さあ、殺せ。お前の思うままに。』

「やめて…くれ…。」

『お前が殺せばいい。お前が逆に憎めばいい。』

「違う…やめろ…。」

『人間を仲間を血に染めろ！』

「やめろおおおおおおおおお！！！！！！！！」

「詩雅野！！」

ハッ！

「！？…白兔？…。」

「大丈夫か？急に大声出して？」

「…僕は…？…！！。」

詩雅野は何かに本能する。

「よける！」

「はア！？」

「！？…危ない！！」

ドンッ！！

空から、大きな何かが降って来た。

そして、詩雅野は白兔と白葉を押して。

そのまま、大きな物の下敷きになった。

「詩雅野！！！！」

## # 12 秘密・正体

「詩雅野!!」

白兔は叫ぶ。

詩雅野は下敷きになった。

「詩雅野!!」

「主。」

「手伝え!!」

白兔と白葉は下敷きになった詩雅野を助けるため。  
上のものをどける。

「はははは、人間は所詮そんな物か。」

「はあ?!!」

「主!!」

「うるさいよ。」

ドンッ!!

「白葉!」

「!?! ガハッ!!」

一人の男に白葉は壁まで吹き飛ばされて、気を失ってしまう。

「お前は...」

「君は、誰を待ってる?」

「!?!」

男は白兔の顔に触れる。

カキンッ!!

「?!?! 詩雅野!!」

「…チツ！」

詩雅野は大きな剣を男に振るが男は剣でそれを受ける。

「詩雅野、酷いね。そんなに僕に会いたくなかった？」

「僕の心はそんな事で崩れない！」

「それは残念だねえ」ニコッ

「うつせつー！」

「詩雅野ー！」

詩雅野は男と戦っていた。

「詩雅野ー！」

「白葉を連れて逃げろー！」

「！？…。」

詩雅野は必死だった。

「白葉！大丈夫か？」

「…主…私は…。」

「逃げるぞ！」

白兔は、白葉を抱えて、逃げる。

「人間を助けるんだね。」

「…あんたには関係ねえー！」

「そう、怖い顔しないで」ニコッ

「…僕はあんたを殺す。」

「本当に…。」

詩雅野の傷が治っていく。

「君みたいなヴァンパイアは初めてだね。」

「……。」

詩雅野は男の目の前から消える。

「詩雅野、遅いよ。」

カキンッ！！

「！？…。」

パシッ！

「？！…あつ…。」

男は詩雅野の剣をつかんで、そのまま詩雅野を壁まで投げる。

「！？…グッ！！」

詩雅野は立ち上がろうとする。

ダンッ！！

「！？…。」

男は詩雅野の横に剣を刺す。

「君はヴァンパイア。人間とは関わっちゃ駄目だよ？」

「……。」

男は詩雅野の顔を上げる。

「あんたに…僕の何がわかる？…。」

「本当に、ウザイヴァンパイアだな！！」

ガッ！

「！…グッ！」

詩雅野は蹴られる。

「君は僕のいう事を聞いていればいい。

所詮、ヴァンパイアの生き残りなんだからね？」ニヤッ

「ハア…ハア…。」

「さっきの異性はどうしました！？」

グサッ！！

「！？…うわあ！！。」

「痛いすよね？」

「クッ…。」

詩雅野は方を剣で刺された。

「詩雅野！！」

「…？！…。」

詩雅野の目の前には、アパートの皆が来た。

「人間ですか。本当に、ウザイですねえ」

「詩雅野！大丈夫か？」

「…来るな…逃げろ…」

「何言つてんだよ！助けに着たんだぞ！！」

「なら、いい事を教えてあげましょう？」

「！？…やめろ…」

男は微笑んだ。

「やめろ！」

「詩雅野？」

詩雅野はとても恐怖を抱いていた。

知られるのが…怖い。

「白夜詩雅野君は、ヴァンパイアの生き残りですよ？」

「！？…」

「……」

### # 13 秘密・契約

「えっ…詩雅野がヴァンパイアの生き残り!？」

「そうだよ？ねえ、殺したら？お金がほしいんでしょう？」

本人の前でよく、殺すとかなんやら言えたね？」ニコッ

「!?!?。」

「クッ…。」

カキンッ!!!

「詩雅野!？」

詩雅野の体から血がポタポタたれているが、詩雅野は剣を振った。

「君も少し鬱陶しいですね。」

ドンッ!!

「!?!?。」

「詩雅野!」

「やっぱり、君。」

「……。」

「そいつらといたら、ヴァンパイア的能力も特殊な能力も反応しないだね。」ニコッ

「!?!?。」

「詩雅野!」

「!?!?グッ…ゲホッ!」

「詩雅野!」

詩雅野は大量の血を吐く。

「来るな!」

「!?!?。」

静は動きを止める。

「…僕はヴァンパイア…もうあんたらと住む世界が違う…。」

「!?!?。」

これでよかった。僕はもう…一人で大丈夫…。

「詩雅野、まだ戦うの？」

「…。」

カキンッ！カキッ！ドンッ！ダンッ！…！

「チッ…。」

「はははは、動きが遅いね。詩雅野」ニコッ

「クッ！…！失せろ！…！！！」

バキッバキッ！！

詩雅野の剣が地面にヒビが割れる。

「ハア…ハア…。」

「詩雅野！…！」

「僕…は…。」

バタンッ

「！？…。」

詩雅野が倒れそうになるが、静が後ろから受け止めた。

「…静…。」

「ヴァンパイアだからって、俺から逃げるな！」

「！？…。」

「逃げんな…俺から。俺を信じろ…！」

「！？…。」

ドクンッ！！

「！？…。」

これって…もしかして。

詩雅野と静の周りに髑髏型の陣が出てきた。

そして、下から鎖が出てきて、詩雅野と静を拘束する。

「なっ！なんだこれ？」

「…マジ…？。」

「はあ？」

「…僕の契約者が静！？」

「はあ！？」

ドクンッ！！

「！？…なんだ？…急に体が…重ッ！…。」

「契約するか？」

「はあ！？」

詩雅野は目の前に来る。

「そしたら、お前は俺から離れないのか？」

「離れないしずっと一緒だと思え！！」

「分かった。」

「…生意気な…静だな。」

「いつもの事だ。」

そして、詩雅野は静の首から血を吸った。

ドクンッ！

「？！……なんだ？…これ？」

「…静の血を吸ったと同時に僕の血を静の体に入れた。」

「そうか…でも。」

グイッ！！

静が詩雅野の手を引つ張る。

「だが…お前が俺のそばにいてくれるなら、これくらい構わないかな。」

「!?!?。」

静は詩雅野の肩に頭を乗せてつぶやく。

「……分かったよ!!」

「くくく、契約をしたか。やっと楽しめそうだね。」

## #14 秘密・サンタ

「う。。。」

僕は、ヴァンパイアと知られ、そして静と契約をしてしまった。  
どうしたらいいんだ？こう言う状況は！！！！！！

「キヤアアアア！！！！」

ドンッ！！！！

「！？。。。」

詩雅野の目の前から少女が降って来た。

「……………」

「いたたたたたた。」

少女は立ち上がる。

「あのッ！どこも当たってませんよね？怪我とかしてないですか！？」

「……いや……してない……。」

何……この、人間……サンタか？……。

ドンッ！

「！？。。。」

詩雅野は急にぞっとする、寒気がした。

なんだ！今の……まるで狼族が僕を見てるかのように……。

「あつ……私は、冬桜雪乃！よろしくね」「ニコッ

……僕は、白夜詩雅野……。」

「意外！！！」

「！？…。」

いきなり、雪乃が詩雅野に顔を近づけてくる。

「意外です！！」

「な…何が？…。」

詩雅野は頬を赤く染める。

グイッ！

「！？…静！」

「何してんだか。」

静は詩雅野の腕を引っ張る。

「…あっお連れ様でしたか。今度は手放してはしないでくださいね」  
ニコッ

「えっ？…。」

「あと、詩雅野君！あなたは”僕”と言うより”俺”の方が一人称が似合いますよ！！」

「なっ！？…余計なお世話だ！」

「えへ！」ニコッ

雪乃はどこかに走って消えてしまった。

「静？…。」

「何か、ヤッパリ体が変な感じだな。」

「…ヴァンパイアの血は少しきついからな。  
全て、なれ。」

「へいへい。」

「で、何買ってきたんだ？」

「ほれ。」

パシッ

静は詩雅野にジュースを投げる。

「喉渴いたろう？」

「…まあ。」

詩雅野はジュースを飲む。

「…さっきのは…なんだ？」ボソッ

僕を感じた。狼族の視線。

人間と思えない人間…。

「もう！！分からん！！…んぐっ！！」

「はいはい。今は、落ち着け。」

静が詩雅野の口にデカイ飴玉を入れた。

「…静のバカ。」

「はいはい。」

「さっきのどうだったんだ？」

「ううゝん…契約してるかも、そんな感じがするなあゝ」「ニッコッ

「なんで、いつもそんな勘で…。」

「銀狼は酷いねえゝ」

「うっせ。さっさと行くぞ。」

「ねえ！」

「ん？」

「ヴァンパイアって狼嫌いななの？」

「点滴って所だ。」

「そっか…。」

「なんだ？」

「いや！」

一人のヴァンパイアと…。

「静…僕と契約してよかったの？」

ヴァンパイアと契約した人間…。

「ああ…俺はお前がそばに居てくれたらそれでいい。」

そして…。

「銀狼、戦うの？」

一人のサンタクロースの少女と…。

「当たり前だ！ヴァンパイアは殺す。それだけの事だ！」

一人の裏切り狼族の少年…。

## # 15 秘密・点滴

「血が…血…ほしい…。」

ハッ！！

「！？…う！」

ズキッ！

詩雅野は頭を抱える。

一瞬頭に激痛が走った。

「…はあ…。」

詩雅野は寝転ぶ。

「…狼…あゝあゝ…！！…もう分からん…！！…！！…！！…」

詩雅野は大声を出した。

パシッ！

「！？…。」

「大丈夫か？」

「静！？」

静が隣から詩雅野の手をつかんで、心配そうな顔をする。

「あつ…おつ。」

「そつか？」

「！？…。」

静が詩雅野のおでこを触る。

詩雅野は顔を真っ赤にする。

「詩雅野？顔が赤いが、大丈夫か？」

「…だ、大丈夫だ！！」

「ふん…。」

詩雅野は静の部屋から出た後に顔を隠した。

何…赤くなつてんだよ…僕は…。

ガシャンッ！

「！？…。」

ドクンッ！

詩雅野の部屋の窓ガラスが割れた。

「…ヴァンパイアの生き残り。」

ドクンッ！

「！？…。」

「あれ？詩雅野は？」

「なんだよ、偉くあいつになつてゐるな。」

「うさぎのお気に入りだからな！」

「はいはい、で詩雅野君は？」

「囊…部屋に居るんじゃないか？」

「何で知らないのよ。」

「いや…見てくる。」

「うん。」

静は部屋に戻る。

「！？…。」

静は自分の部屋を見て。

割れたガラスは部屋中に飛び散つていて、詩雅野のベッドはびりびりだった。

「!?!?。」

そして、詩雅野のベッドに血がついていた。

「詩雅野!」

「静?」

静は急いで、外に出て行つた。

「ハア…ハア…。」

「ヴァンパイアは殺す。それが狼族の運命。」

「…お前は…違う。」

「はあ?」

「お前は…血が違う。」

「!?!?。」

詩雅野の瞳は真っ赤になって、髪は漆黒の髪に変化した。  
そして、背中には黒い羽があるように見える。

「お前は、裏切りの狼族。」

「!?!? チツ!」

カキンッ!!

「僕に勝てると思うなよ?」

「ヴァンパイアだからなんだ?」

カキンッ!

「貴様は、自分の未来が見えないんだろ?」

「!?!? お前に関係などない!!」

グサッ!!

「!?!?。」

「お前の動きは全て遅い。」

カランッ

詩雅野は肩を刺された。

「ヴァンパイアでも、治るのは早い。だがさっさと殺せば話は早い。」

「……。」

「契約をすれば、力半分は失うのだろうか？」

「?!…チツ…。」

詩雅野は刺された右手は使わないで、左手で剣を拾う。

「ハア…ハア…、それがどうした？僕は死んでも構わない存在だ！」

「はっ！それなら、殺してやるよ！…！」

「…チツ…。」

『詩雅野…好きだよ』ニコッ

「!?!?。」

詩雅野の動きが急に止まった。

そして、瞳の色が黒と赤が混ざった色に変わった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4316y/>

---

赤の破壊者

2011年12月2日20時54分発行